

台灣人日本語學習者における日本語単語の意味処理—意味判断課題を用いた検討

陳相州/ Chen, Shiang-Jou

東吳大學日本語文學系助理教授

Department of Japanese Language and Culture,

Soochow University

【摘要】

本論文使用基於詞意判斷作業的實驗，以探討日語單字的詞頻與熟悉度對於台灣人日語學習者在日語單字詞意的認知連結上所造成的影響。透過收集及分析台灣人日語學習者在實驗時的反應時間與正確率，我們釐清了台灣人日語學習者在判斷日語單字詞意時受到單字詞頻與熟悉度的影響程度。

【關鍵詞】

台灣人日語學習者、詞意判斷作業、詞頻、熟悉度、日語詞彙能力

【Abstract】

The purpose of this study is to investigate the influence of word frequency and word familiarity on meaning decision. This study aimed to explore, via meaning decision tasks, the influences of word frequency and word familiarity on the cognition of Japanese words of Taiwanese Japanese learners and which of the influences is stronger. The information about the speed and the accuracy will be collected in meaning decision tasks. As a result, it will be clarified whether word frequency and word familiarity affect linking the meaning of Japanese.

【Keywords】

Taiwanese Japanese learners, meaning decision tasks, word frequency, word familiarity, Japanese vocabulary

1. はじめに

人間の言語情報処理において、メンタルレキシコン (mental lexicon) というものが不可欠だと考えられる。メンタルレキシコンとは、人間の長期記憶の中で、語の形態 (Morphology)、意味 (Meaning)、音韻 (Phonology)、統語 (Syntax) といった情報が格納されているところである。私たち人間が言葉を産出・受容する際には、脳内にあるメンタルレキシコンの情報へのアクセスや検索、引き出しなどのプロセスが繰り返して行われている。しかし、そのプロセスには様々な要因が影響を及ぼすと考えられている。メンタルレキシコン内の語彙項目へのアクセスにおいては、基本的な影響要因として考えられるのは単語の頻度 (frequency) と親密度 (familiarity) である。単語の頻度は特定の文書やコーパスなどにおいて実際に使用された回数であり、単語の親密度は一個人がある単語に対するなじみ度である。門田 (2006 : 32) が単語の出現頻度や親密度の影響について、高頻度や親近性の高い単語は、それだけ検索されやすい状態でメンタルレキシコン内に格納されていると説明している。

本研究では台湾人日本語学習者のメンタルレキシコン、特に語の意味へのアクセスのメカニズムを究明するために、単語の頻度と親密度が与える影響を分析して考察する。

2. 先行研究

第二言語学習者の単語意味のアクセスについて実証的に検討したものとして、門田 (1998) と横川・藪内・谷村 (2004) などの研究が挙げられる。

門田 (1998) では外国語として英語を学ぶ日本人英語学習者を対象に、視覚提示された英単語の意味理解に語の出現頻度と長さがいかに影響するかを考察した。その結果は、出現頻度レベルの分析では、英単語の意味理解に有意に影響するが、単語の長さについては、アクセス過程にあまり影響しないことがわかった。

一方、横川・藪内・谷村 (2004) では日本人英語学習者のメ

ンタルレキシコンの個々の単語の意味へのアクセスに、単語の頻度と親密度が与える影響の度合いを調査した。調査の結果からは、単語の頻度と親密度ともに英単語の意味アクセスの速さと正確さに影響を及ぼしたが、親密度の方が頻度よりも要因として強そうな傾向が見られた。

以上の先行研究の結果をまとめると、次のようになる。日本人英語学習者にとっては、英単語の意味理解のプロセスにおいて、英単語の長さによる影響が見られず、単語の頻度と親密度による影響が見られた。しかも、その影響の度合いとして、親密度の方が頻度よりも大きな要因である可能性も示唆された。しかしながら、門田（1998）と横川・薮内・谷村（2004）の研究はともに外国語として英語を学ぶ日本人英語学習者を対象にしたもので、台湾人日本語学習者を対象とした研究は未だにないようである。果たして同じく第二言語学習者である台湾人日本語学習者の結果は日本人英語学習者と同じような結果が得られるであろうか。それを究明するために、本研究では意味判断課題を用い、単語の頻度と親密度の違いがどのように台湾人日本語学習者の日本語単語の意味アクセスに影響を与えるのかを調査する。

3. リサーチ・クエスチョン

本研究では、以下のようなリサーチ・クエスチョンを設ける。

- ① 日本語単語の意味へのアクセスにおいては、単語の親密度と頻度の違いは台湾人日本語学習者の反応時間と誤答率に影響を与えるのか。
- ② 調査結果は台湾人日本語学習者の日本語の語彙力に影響を受けるのか。

以上の2点について、意味判断課題を用いて検討する。

4. リサーチ・デザイン

4.1 実験協力者

実験協力者は台湾国内の大学及び外国語大学に在籍する学生

54 名（男性 6 名、女性 48 名）である。実験協力者の平均年齢は 21 歳 5 ヶ月（標準偏差 2 歳 10 ヶ月）であり、平均日本語学習歴は 3 年 10 ヶ月（標準偏差 1 年 4 ヶ月）である。なお、実験協力者全員は右利きである。

4.2 語彙力の判定

本研究では、日本語の語彙力が異なる学習者の分析結果には相違が見られるか否かを究明するために、宮岡・酒井・玉岡（2011）の日本語の語彙テストを用いて実験協力者をグループ分けする。このテストは四者択一の選択問題で、全問題数は 48 問である。テストで問う語彙知識は、動詞、形容詞、名詞、機能語が含まれており、各項目についてそれぞれ 12 問ずつ偏りなく均等に問題が設定されている。例えば、「彼のスピーチは、結婚式に（ ）内容の、いいスピーチだった。」という質問に対し、「☐おびたしい ☐ふさわしい ☐おとなしい ☐まぎらわしい」という 4 つの選択肢から正解を 1 つ選択する。この例だと、正解は「ふさわしい」である。

満点 48 点のテストであるが、このテストの実験協力者の得点の平均は 28.5 点で、標準偏差は 6.79 点であった。そこで、平均にもっとも近い整数である 29 点を基準として、その前後 2 点、すなわち 27 点から 31 点の実験協力者のデータを排除し、32 点以上の実験協力者を上位群、26 点以下の実験協力者を下位群とした。その結果、上位群の実験協力者は 20 名、下位群の実験協力者は 24 名となった。上位群と下位群のそれぞれの得点の平均値、標準偏差と t 検定の結果を表 1 で示す。

表 1 グループ別の平均値及び標準偏差

グループ	語彙テスト	
	平均	標準偏差
上位群 (n=20)	36.00	4.13
下位群 (n=24)	22.50	2.27
t 検定	$t(28.254)=13.073, p<.001$ ***	

表 1 からわかるように、上位群と下位群の実験協力者の日本語の語彙能力に差があるか否かを独立したサンプルの t 検定 (Independent-Sample T test) で検討した結果、上位群と下位群の間には日本語の語彙能力に有意な差が見られた。すなわち、上位群学習者の日本語の語彙力は下位群学習者より優れているといえよう。以下では、上位群と下位群の実験協力者の実験結果を見ていく。

4.3 刺激語の選択

この節では、刺激語の選定について説明する。まず、台湾人日本語学習者の日本語単語親密度データベース¹を用い、以下のような条件で、刺激組を 4 つ作成することにした。

- ・ (I) 親密度+・頻度+
親密度と頻度ともに順位が 500 位以内で、その差は±200 位以内のものである。
- ・ (II) 親密度+・頻度-
親密度順位は 500 位以内で、頻度との順位差が 1000 位以上あるものである。
- ・ (III) 親密度-・頻度+
頻度順位は 500 位以内で、親密度との順位差は 1000 位以上あるものである。
- ・ (IV) 親密度-・頻度-
親密度と頻度ともに順位が 2500 位以外で、その差は±200 位以内のものである。

次に、各組において、文字数が 1 文字数、2 文字数、3 文字数、4 文字数の日本語単語をそれぞれ 4 語ずつ選定した。このようにして、4 つの刺激組で計 64 語の日本語単語が得られた。なお、

¹ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』にある頻度順位の高い 3000 語に対して行った大規模の台湾人日本語学習者の日本語単語親密度調査である。詳細は陳 (2014) を参照。

1 文字数と 2 文字数の日本語単語は漢字表記の漢語を選定し、3 文字数と 4 文字数の日本語単語は仮名表記の和語を選定することにした。

Leong, Cheng & Mulcahy (1987 : 184) が論じたように、視覚的に提示された語彙処理の反応時間を計測する際に、語彙の複雑さ²が反応時間に影響があると考えられる。そのため、刺激語を選定する際に、1 文字数の日本語単語の画数を 12 画数以下のものにし、2 文字数の日本語単語の総画数を 12 画以上から 20 画数のものにした。本研究の実験で用いる各組の 1 文字数と 2 文字数の日本語単語の総画数をそれぞれ一元配置の分散分析 (One-way Anova) で検定した。その結果、1 文字数の場合においては、各組の間に有意な差がなく [$F(3, 12)=1.538, p=.255, n.s.$]、2 文字数の場合も同様であった [$F(3, 12)=0.764, p=.536, n.s.$]。従って、提示語彙の画数による影響を排除したと考えられよう。また、上記の 64 語の日本語単語は本研究の刺激語となった。

4.4 選択肢の作成

本研究の刺激語となった 64 語の日本語単語に対して 3 つの中国語の選択肢³を作成した。その 3 つの選択肢は正解、正解に関連のある不正解、全く関連のない不正解からなるようにした。なお、中国語の選択肢の文字数は同じようにし、日本語単語と同様な表記を避けるようにした。以下は本研究の実験に使用した日本語の単語と中国語訳語選択肢からいくつか抜粋したものである。

- ・ (I) 親密度+・頻度+
 - 家 (V) 房屋 (B) 客廳 (N) 飛機
 - 名前 (V) 職稱 (B) 名字 (N) 平安
- ・ (II) 親密度+・頻度-
 - 桜 (V) 梅花 (B) 櫻花 (N) 長工

² 単語の総画数の意味を指す。

³ 詳細は付録を参照。

- 恋人 (V) 罷工 (B) 家人 (N) 情人
- ・ (Ⅲ) 親密度-・頻度+
逆 (V) 一樣 (B) 相反 (N) 工藝
判断 (V) 評斷 (B) 放棄 (N) 捐助
 - ・ (Ⅳ) 親密度-・頻度-
党 (V) 國家 (B) 政黨 (N) 拍賣
仕草 (V) 眼神 (B) 舉止 (N) 紀念

上記にも述べたように、提示語彙の総画数が反応速度に影響を与える可能性があるとは指摘されている (Leong, Chang & Mulcahy 1987: 184)。各刺激組における 1 文字数、2 文字数、3 文字数、4 文字数の日本語単語の選択肢の総画数に違いがあるのかを調べるために、文字数ごとに一元配置の分散分析を行った。その結果を以下の表 2 にまとめた。

表 2 文字数ごとの選択肢の総画数に対する検定結果

種類	検定結果
1 文字数	$F(3, 12)=1.006, p=.424, n.s.$
2 文字数	$F(3, 12)=2.379, p=.121, n.s.$
3 文字数	$F(3, 12)=1.187, p=.356, n.s.$
4 文字数	$F(3, 12)=0.416, p=.744, n.s.$

以上からわかるように、各刺激組における文字数ごとの選択肢の総画数に有意差がなく、提示語彙の画数による影響を排除できたと考えられよう。

4.5 実験手順

本研究では、反応速度測定用の実験ソフトである SuperLab を利用し、意味判断課題を実施した。意味判断課題とは、実験協力者にターゲットの文字列を呈示し、その単語の意味を選択肢からできるだけ速く判断してもらうという課題である。具体的には、次のような手順で実験を進めた。

- ① 実験協力者に実験協力承諾書を記入してもらった。

- ② 実験に関する説明を 15 インチのノートブック型コンピューターの画面で呈示し、その際に実験協力者から質問などがあればそれに応じた。
- ③ できるだけ速く判断してもらうように再度指示した。
- ④ 本実験を始める前に、実験協力者に本実験の操作方法に慣れてもらうために、5 問の練習課題を行った。
- ⑤ 実験の 1 つの試行の流れは次のようである。まず、画面の中央部に++の凝視点が現れる。その後で、刺激語がその位置に現れる。次に、その単語の意味を問う選択肢が現れる。最後に、実験協力者は刺激語を見て 3 つの選択肢から正しい意味を選び、所定のキー⁴を押す。
- ⑥ 刺激語が呈示されてから、キーを押すまでの反応時間とその判断の誤答率を測定した。
- ⑦ 刺激語はランダムに提示した。

5 分析方法

5.1 反応時間の分析方法

分析に先立って、200 ミリ秒以下 5000 ミリ秒以上の反応時間は誤答とし、除外した。更に各実験協力者の反応時間の平均から標準偏差で 2.5 以上及び 2.5 以下の反応時間を、各実験協力者の標準偏差 2.5 の境界値で置き換えて分析を進めた。この手続きで 75 項目 (2.69%) が置き換えられた。なお、反応時間の分析は正しく判断された項目だけを用いて分析を行った。

5.2 誤答率の分析方法

データの正規性に問題があるため、実験協力者ごとの各刺激組の誤答率のデータを逆正弦関数で角変換 (angular transformation) を施した。

6 分析結果

⁴ 選択肢の内容に対応する「V」キー、「P」キー、「N」キーを押すように指示した。

以下では、上位群学習者の結果、下位群学習者の結果、両グループ間の比較結果を論ずる。

6.1 上位群学習者の結果

まず、上位群学習者の反応時間を見してみる。表 3 は上位群学習者の反応時間を分析した結果である。

表 3 上位群学習者の反応時間の分析結果

	反応時間 (ms)	標準偏差
(I) 親密度+・頻度+	1060	180
(II) 親密度+・頻度-	1012	155
(III) 親密度-・頻度+	1455	370
(IV) 親密度-・頻度-	1607	405
分散分析の主効果	$F(3, 57)=32.512, p<.001***$	
多重比較 ⁵	<u>I</u> <u>II</u> <u>III</u> <u>IV</u>	

一要因（刺激組）の分散分析を行ったところ、主効果が有意であった [$F(3, 57)=35.512, p<.001***$]。ボンフェローニによる多重比較で検討した結果、(I) 親密度+・頻度+と(II) 親密度+・頻度-の場合には有意差がなく、ほかの2つの場合より反応時間が有意に速かった。また、(III) 親密度-・頻度+と(IV) 親密度-・頻度-の場合にも有意な差が見られなかった。すなわち、上位群学習者の日本語単語の意味アクセスにおいては、親密度による影響のみが認められたが、親密度の高い単語は親密度の低い単語より反応時間が速かったということがわかった。

次に、表 4 の上位群学習者の誤答率を見してみる。

表 4 上位群学習者の誤答率の分析結果

	誤答率 (角変換値)	標準偏差
(I) 親密度+・頻度+	4.34	6.81

⁵ 多重比較は有意水準 5%で行った。下線が引かれたものは有意差がなく、異なった下線のものは有意差があることを示す。

(Ⅱ) 親密度+・頻度-	8.11	8.73
(Ⅲ) 親密度-・頻度+	7.80	9.23
(Ⅳ) 親密度-・頻度-	18.33	9.74
分散分析の主効果		$F(3, 57)=9.128, p<.001***$
多重比較		<u>I</u> <u>II</u> <u>III</u> <u>IV</u>

上位群学習者の誤答率を分散分析で検討したところ、主効果があったことが判明した [$F(3, 57)=9.128, p<.001***$]。ボンフェローニの方法による多重比較を行った結果、(Ⅰ) 親密度+・頻度+、(Ⅱ) 親密度+・頻度-と(Ⅲ) 親密度-・頻度+の3つの場合の間には有意差が見られず、(Ⅳ) 親密度-・頻度-の場合より誤答率が有意に低かった。言い換えれば、上位群学習者が親密度の高い語と、親密度が低い頻度の高い語に対し、意味を処理する際の正確さは高かったが、頻度と親密度ともに低い単語を処理する際の正確さは低かったということが明らかになった。

以上の分析結果をまとめると、次のようである。上位群学習者の意味アクセスの迅速さに影響を与えたのは単語の親密度である。親密度の高い単語は親密度の低い単語より反応時間が速かった。一方、正確さにもっとも影響を与えたのは親密度であるが、但し、親密度の低い単語でも頻度が高ければ、親密度の高い単語を処理する場合と同様に高い正答率が観察された。

6.2 下位群学習者の結果

前節では上位群学習者の意味処理の結果を見たが、この節では下位群学習者の結果を見る。

表 5 下位群学習者の反応時間の分析結果

	反応時間 (ms)	標準偏差
(Ⅰ) 親密度+・頻度+	1083	159
(Ⅱ) 親密度+・頻度-	1046	147
(Ⅲ) 親密度-・頻度+	1663	339

台湾人日本語学習者における日本語単語の意味処理
—意味判断課題を用いた検討

(Ⅳ) 親密度-・頻度-	1846	405
分散分析の主効果	$F(3, 69)=73.967, p<.001***$	
多重比較	<u>I</u>	<u>II</u> <u>III</u> <u>IV</u>

下位群学習者の反応時間について一要因の分散分析を行った結果、表 5 に示したように、主効果は有意な結果が得られた [$F(3, 69)=73.967, p<.001***$]。ボンフェローニの多重比較を行ったところ、上位群学習者の結果と同様な結果が得られた。すなわち、(Ⅰ) と (Ⅱ) のような親密度の高い刺激組と、(Ⅲ) と (Ⅳ) のような親密度の低い刺激組においては、それぞれの刺激組間には有意な差がなく、親密度の高い刺激組は親密度の低い刺激組より反応時間が速かった。このことから、下位群学習者の日本語単語の意味処理の反応時間に影響を与えたのは単語の親密度であるということがいえよう。親密度の低い単語に比べ、下位群学習者が親密度の高い単語の意味を処理する際の迅速さが速かった。

次に、下位群学習者の意味処理の誤答率を検討する。

表 6 下位群学習者の誤答率の分析結果

	誤答率 (角変換値)	標準偏差
(Ⅰ) 親密度+・頻度+	9.09	8.97
(Ⅱ) 親密度+・頻度-	7.64	8.86
(Ⅲ) 親密度-・頻度+	24.51	5.81
(Ⅳ) 親密度-・頻度-	30.03	6.81
分散分析の主効果	$F(3, 69)=51.909, p<.001***$	
多重比較	<u>I</u>	<u>II</u> <u>III</u> <u>IV</u>

下位群学習者が各刺激組の日本語単語に対して誤答した比率を分散分析で検定したところ、表 6 に示したように主効果があった [$F(3, 69)=51.909, p<.001***$]。ボンフェローニによる多重比較で検討した結果、(Ⅰ) 親密度+・頻度+ と (Ⅱ) 親密度+・頻度-の間には有意差がなく、誤答率がもっとも低い、(Ⅲ) 親密度-・頻度+、(Ⅳ) 親密度-・頻度-の順に誤答率が高くな

っていることがわかった。つまり、下位群学習者が親密度の低い単語よりも親密度の高い単語に対する意味処理の正確さが高かったことが明らかになった。また、親密度の低い単語の意味処理には、頻度による影響が見られた。同じ親密度の低い単語でも、頻度の高い単語は頻度の低い単語より処理の正確さが高かった。

以上の分析からは、下位群学習者が親密度の高い単語に対し、意味処理の時間が速く、正確さも高いことが判明した。また、親密度の低い単語を処理する際の正確さには単語の頻度による影響も見られた。同じ親密度の低い単語でも、頻度の高い単語は頻度の低い単語より処理の正確さが高かった。

6.3 上位群学習者と下位群学習者との比較

以上では、上位群学習者と下位群学習者の各自の分析結果を見てきたが、この節では、上位群学習者と下位群学習者の両グループが日本語単語の意味認知をする際の反応時間と誤答率に違いがあるか否かを検討する。

まず、反応時間の結果を見ていく。下の図 1 は上位群学習者と下位群学習者が各刺激組に対する反応時間のまとめである。2（学習者グループ）×4（刺激組）の二元配置分散分析を行った結果、学習者グループと刺激組の交互作用は有意ではなかった [$F(3, 126)=2.629, n.s.$] が、刺激組の主効果のみは有意であった [$F(3, 126)=100.176, p<.001***$]。すなわち、(Ⅰ)と(Ⅱ)のような親密度の高い刺激組は(Ⅲ)と(Ⅳ)のような親密度の低い刺激組より意味アクセスの反応時間が速かった。

日本語単語の意味処理の迅速さにおいては、上位群学習者も下位群学習者も親密度による影響のみが認められたが、親密度の高い単語は親密度の低い単語より反応時間が速かった。このことは前節の分析結果からも既にわかったが、この節の調査を通して更に明らかにしたのは学習者が日本語単語の意味を判断する際の迅速さは学習者自身の日本語の語彙力による影響を受けないということである。

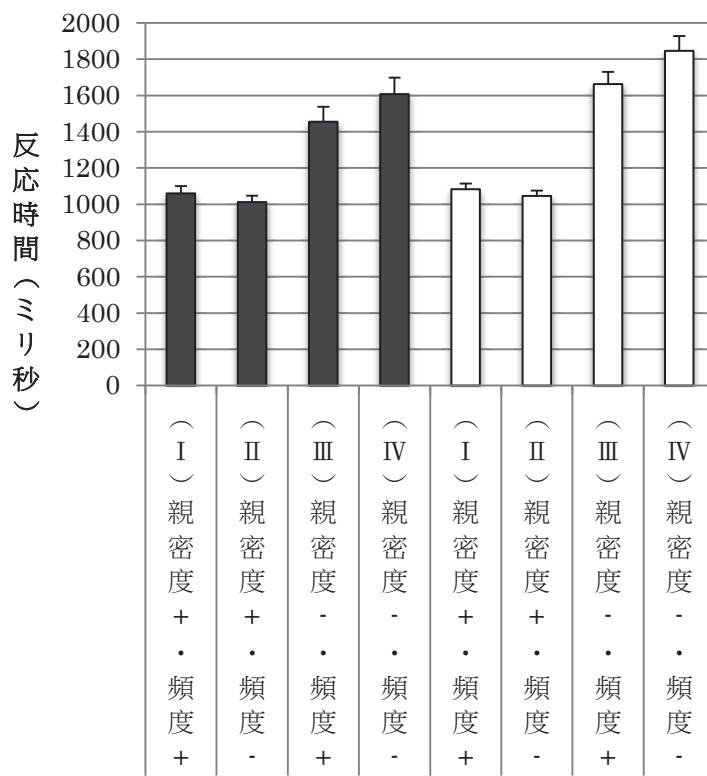


図 1 上位群学習者と下位学習者の反応時間の比較⁶

次に、上位群学習者と下位学習者の誤答率の結果を見ていく。下の図 2 の結果を分散分析で検定した結果、学習者グループと刺激組の交互作用が有意であった [$F(3, 126)=9.234, p<.001^{***}$]。それで、単純主効果を分析したところ、(III) 親密度-・頻度+と (IV) 親密度-・頻度-の場合においては、上位群学習者は下位群学習者より誤答率が低かった。つまり、親密度の低い単語の意味アクセスに関しては、日本語の語彙力による相違があり、上位群学習者の正確さが高かった。

⁶ 棒グラフの上部に示したのは標準誤差である。

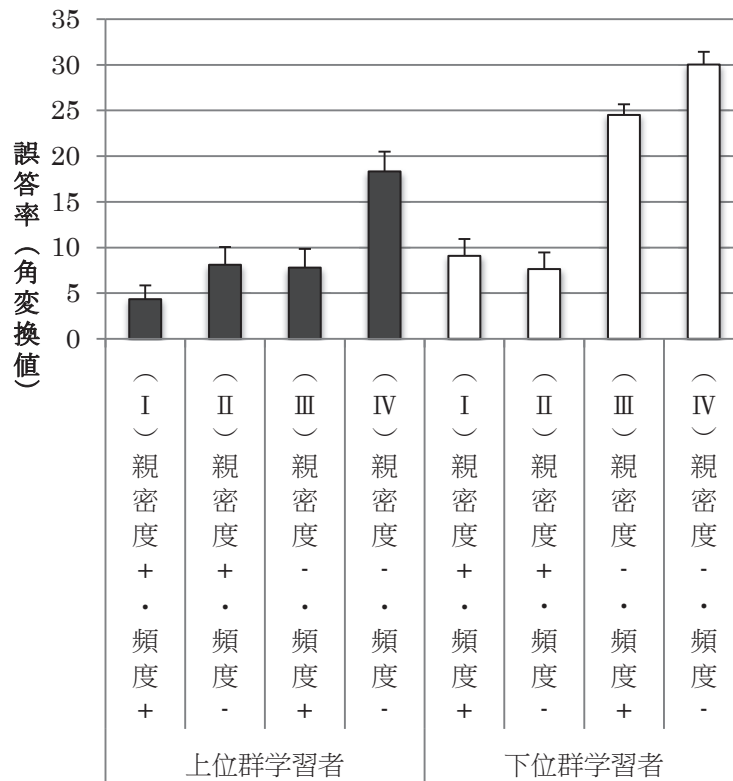
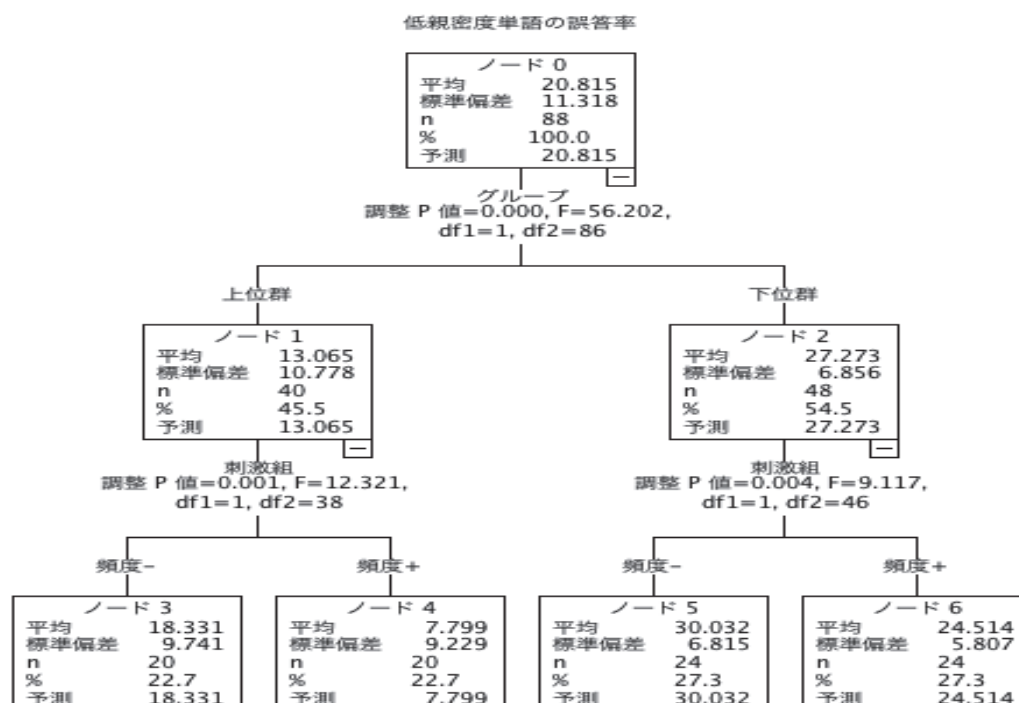


図 2 上位群学習者と下位学習者の誤答率の比較

この節の調査を通してわかったのは、台湾人日本語学習者が日本語単語の意味処理をする際には、学習者がもつ日本語の語彙力による影響は低親密度単語の処理の正確さのみに観察されたということである。換言すれば、学習者が親密度の低い単語の意味を認知する際に、判断の迅速さは学習者自身の日本語の語彙力と関係ないが、但し、最終判断の正確さから言えば、語彙力の高い学習者は語彙力の低い学習者より正確さが高い。

6.4 低親密度単語の影響要因に関する分析

以上の調査結果からわかるように、台湾人日本語学習者が低親密度単語の意味を処理する際に、その正確さは日本語単語の出現頻度と学習者自身の語彙力に大きく関わっている。そのため、単語の出現頻度と学習者の語彙力という 2 つの要因が低親



密度単語の意味アクセスの正確さにどの程度の影響を及ぼすのかを検討するにあたって、本研究では決定木分析（decision tree analysis）という統計手法を取った。その原因は、決定木分析では分類結果に有意な影響を持つ要因が強いものから順に現れるため、複数の要因の階層性を検討するのに役立つからである（木山・玉岡 2011：46）。

本研究では、台湾人日本語学習者が低親密度単語を処理する際の誤答率を目的変数（dependent variable）とし、グループと刺激組を説明変数（independent variable）として検定を行った。その結果は以下のようなデンドログラムとなる。

図3 低親密度単語の誤答率に影響する要因の決定木

図 3 からは、決定木は出発点であるノード 0 から、学習者グ

ループの上位群（ノード 1）と下位群（ノード 2）からなる 2 つのノードに分岐していることがわかった [$F(1, 86)=56.202, p<.001***$]。グループという要因が先に出たのは、低親密度単語の意味アクセスの正確さにもっとも影響を与えたのは学習者の日本語の語彙力であることを意味している。ノードの平均値からわかるように、上位群学習者が低親密度単語の意味を処理する際の誤答率は下位群学習者より低かった。言い換えれば、語彙力の高い学習者が低親密度単語の意味を処理する際の正確さは高かった。それから、上位群（ノード 1）から頻度-（ノード 3）と頻度+（ノード 4）の樹木が伸びている [$F(1, 38)=12.321, p<.01**$] のに対し、下位群（ノード 2）からも頻度-（ノード 5）と頻度+（ノード 6）の樹木が伸びている [$F(1, 46)=9.117, p<.01**$] ことがわかった。各ノードの平均値から言うと、上位群学習者と下位群学習者が低親密度単語の意味を判断する際に、同じく単語の出現頻度による影響を受け、頻度の高い単語の誤答率が低かった。以上の決定木分析の結果をまとめると、次のようになる。低親密度単語の意味判断の正確さにもっとも影響を与えたのは学習者自身の日本語の語彙力であり、その次は単語の出現頻度である。

7 リサーチ・クエスチョン再考

以下ではリサーチ・クエスチョンに従い、意味判断課題を通して判明した結果を述べる。

- ① 日本語単語の意味へのアクセスにおいては、親密度と頻度の違いは台湾人日本語学習者の反応時間と誤答率に影響を与えるのか。

台湾人日本語学習者が日本語単語の意味アクセスをする際に、日本語単語の親密度による影響が大きかった。特に、意味処理の反応時間には、単語親密度の影響のみが観察された。一方、意味処理の誤答率に関しては、高親密度単語の場合は正確さが高かったが、低親密度単語の場合は学習者の語彙力によって相

違が見られた。すなわち、単語の親密度が低くても出現頻度が高ければ、日本語の語彙力の高い学習者にとっては、意味処理の正確さが親密度の高い単語を扱う際と同じように高かった。それに対し、語彙力の低い学習者にとっては、低親密度単語を処理する際の正確さは高親密度単語ほどではなく、単語の出現頻度による影響も見られた。

- ② 調査結果は台湾人日本語学習者の日本語の語彙力に影響を受けるのか。

台湾人日本語学習者の日本語の語彙力による影響は低親密度単語の意味を処理する際の正確さのみに観察された。つまり、日本語の語彙知識が豊富な上位群学習者はそうでない下位群学習者に比べ、親密度が低い日本語単語の意味を正確に判断することができることを示している。また、低親密度単語の意味判断の正確さにもっとも影響を与えたのは学習者自身の日本語の語彙力であり、単語の出現頻度はその次の影響要因であるということも判明した。

8 おわりに

本研究では、単語の親密度と頻度が台湾人日本語学習者の日本語単語の意味処理に与える影響を解明するために、意味判断課題を用いた実験を行った。その結果、日本語単語の意味アクセスの迅速さと正確さにもっとも影響を与えたのは単語の親密度である。単語の頻度による影響は親密度の低い単語の意味を処理する際の正確さのみに観察された。但し、更に詳しく調査すると、低親密度単語の意味処理の正確さには、単語の頻度よりも学習者自身のもつ語彙力が大きな影響要因であることが明らかになった。

今後は台湾人日本語学習者の文レベルの理解において、単語の頻度と親密度が与える影響を調査していきたい。このような調査の成果を重ねていくと、台湾人日本語学習者のメンタルレキシコンのメカニズムを解明するのに役に立ち、また台湾人日

本語学習者向けの教科書やテスト作成などに大いに利用されることができると考えられる。

参考文献

- 門田修平 (1998) 「英単語の意味理解におよぼす語の出現頻度と長さの影響」『ことばとコミュニケーション』2, pp. 28-41.
- (2006) 『第二言語理解の認知メカニズム-英語の書きことばの処理と音韻の役割』くろしお出版.
- 木山幸子・玉岡賀津雄 (2011) 「自他両用の「-化する」における自動詞用法と他動詞用法の比較—新聞コーパスの用例に基づく多変量解析—」『言語研究』139, pp. 29-56.
- 陳相州 (2014) 「台湾人日本語学習者を対象とした日本語単語親密度データベースの構築」『比較文化研究』111, pp. 167-179.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2011) 「日本語語彙テストの開発と信頼性-中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価-」『広島経済大学紀要』34(1), pp. 1-18.
- 横川博一・藪内智・谷村緑 (2004) 「単語認知プロセスにおける語彙の生成頻度・親密度情報の影響-語彙性判断課題・意味性判断課題による検討-」『第30回全国英語教育学会長野研究大会予稿集』pp. 696-699.
- Leong, C. K., Cheng, P-W. & Mulcahy, R. (1987) Automatic Processing of Morphemic Orthography. *Language and Speech*, 30, pp. 181-196.

付記

本研究は 102 年度行政院国家科学委員会專題研究「架構台灣人日語學習者的日語單字熟悉度資料庫(Ⅱ): 基於詞彙/詞意判斷作業的考察」(NSC102-2410-H-031-025-) の研究成果の一部である。

本論文於 2014 年 10 月 9 日到稿, 2015 年 1 月 13 日通過審查。

付 録

刺激組	文字数	刺激語	選択肢		
(I) 親密度 + ・ 頻度 +	文字数 1	家	(V)房屋	(B)客廳	(N)飛機
		物	(V)食物	(B)物品	(N)天上
		声	(V)獎金	(B)音響	(N)聲音
		父	(V)父親	(B)母親	(N)今年
	文字数 2	名前	(V)職稱	(B)名字	(N)平安
		言葉	(V)盈餘	(B)思考	(N)言詞
		手紙	(V)信件	(B)郵票	(N)機關
		一緒	(V)夥伴	(B)一起	(N)彩券
	文字数 3	ところ	(V)喜樂	(B)椅子	(N)地方
		もらう	(V)獲得	(B)給予	(N)重傷
		うまい	(V)難吃	(B)美味	(N)不足
		できる	(V)同情	(B)不行	(N)能夠
	文字数 4	どうして	(V)為何	(B)因為	(N)到底
		もちろん	(V)未定	(B)當然	(N)趕緊
		ゆっくり	(V)盡量 地	(B)快速 地	(N)慢慢 地
		たくさん	(V)很多	(B)很少	(N)不必
(II) 親密度 + ・ 頻度 -	文字数 1	桜	(V)梅花	(B)櫻花	(N)長工
		円	(V)英雄	(B)台幣	(N)日圓
		彼	(V)他	(B)我	(N)福
		昼	(V)晚上	(B)中午	(N)用戶
	文字数 2	恋人	(V)罷工	(B)家人	(N)情人
		完成	(V)完工	(B)破壞	(N)考慮
		注文	(V)電話	(B)訂購	(N)拆除
		冗談	(V)暖身	(B)認真	(N)玩笑
	文字数	あなた	(V)你	(B)牠	(N)氣

台湾人日本語学習者における日本語単語の意味処理
—意味判断課題を用いた検討

	3	どうぞ	(V)那	(B)請	(N)看
		ノート	(V)電線	(B)鉛筆	(N)筆記
		カメラ	(V)相機	(B)照片	(N)收盤
	文字数 4	びっくり	(V)抽筋	(B)吃驚	(N)營運
		そろそろ	(V)表現	(B)終於	(N)快要
		うるさい	(V)煩	(B)靜	(N)想
		かわいい	(V)可憐	(B)可愛	(N)改組
(Ⅲ) 親密度・頻度 +	文字数 1	常	(V)煙火	(B)不常	(N)經常
		略	(V)省略	(B)添加	(N)螢光
		逆	(V)一樣	(B)相反	(N)工藝
		訳	(V)衣著	(B)説明	(N)理由
	文字数 2	判断	(V)評斷	(B)放棄	(N)捐助
		一部	(V)一條	(B)一份	(N)中風
		同様	(V)視力	(B)不同	(N)相同
		非常	(V)極度	(B)不明	(N)黑洞
	文字数 3	かなり	(V)相對地	(B)相當地	(N)敏捷地
		むしろ	(V)辨識	(B)願意	(N)寧可
		かつて	(V)曾經	(B)現在	(N)瞳孔
		やがて	(V)立即	(B)不久	(N)無線
	文字数 4	まったく	(V)闢建	(B)稍微	(N)完全
		さきほど	(V)剛才	(B)未來	(N)請求
		みつめる	(V)分心	(B)凝視	(N)收集

		うなずく	(V)慶祝	(B)搖頭	(N)點頭
(IV) 親密度・頻度-	文字数 1	軸	(V)核心	(B)外圍	(N)樂曲
		党	(V)國家	(B)政黨	(N)拍賣
		章	(V)洋裝	(B)書籍	(N)章節
		矢	(V)箭	(B)盾	(N)盼
	文字数 2	見当	(V)事實	(B)推斷	(N)打算
		根本	(V)收藏	(B)盡頭	(N)根源
		理屈	(V)道理	(B)話語	(N)開通
		仕草	(V)眼神	(B)舉止	(N)紀念
	文字数 3	やたら	(V)可惜 地	(B)有序 地	(N)胡亂 地
		ぱっと	(V)一下 子	(B)緩慢 地	(N)清楚 地
		ゆでる	(V)煎	(B)煮	(N)優
		リボン	(V)評估	(B)針線	(N)緞帶
	文字数 4	じつくり	(V)仔細 地	(B)概略 地	(N)儘快 地
		ためらう	(V)決定	(B)猶豫	(N)補助
		おおげさ	(V)廚房	(B)正常	(N)誇張
		あっさり	(V)清淡	(B)濃稠	(N)差距